

第33回 やまぐち眼科フォーラム

謹啓

時下、先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、この度下記要綱にて、「第33回やまぐち眼科フォーラム」を開催する事となりました。
ご多用とは存じますが、ご臨席賜わりますようご案内申し上げます。

謹白

記

【開催日時】 2020年1月18日(土) 17:30~19:30

【開催場所】 山口グランドホテル 3階『未広』
山口県山口市小郡黄金町1-1 TEL:083-972-7777

【会費】 3,000円

プログラム

【特別講演①】

座長：山口県眼科医会 会長

大西眼科 院長 大西 徹 先生

『複視の対処方ー上下・回旋斜視を中心に』

演者：兵庫医科大学 眼科学講座 准教授 木村 亜紀子 先生

【特別講演②】

座長：山口大学大学院医学系研究科 眼科学 教授 木村 和博 先生

『眼科における治療薬の新しい時代：生物学製剤や他の新薬』

演者：杏林大学医学部 眼科学 教授 岡田 アナベル あやめ 先生

※生涯教育認定事業 No16861 2単位

※会場にてお弁当をご用意しております

【共催】 山口県眼科医会

ノバルティスファーマ株式会社

1994年 兵庫医科大学卒業
1997年 兵庫医科大学病院眼科医員
2003年 兵庫医科大学大学院卒業
兵庫医科大学眼科学講座助手
2008年 同 講師
2013年 同 准教授
現在に至る

『複視の対処法—上下・回旋斜視を中心に』

上下・回旋斜視は外観上目立たないため、診断までに時間を要することが少なくない。しかし、上下・回旋複視は日常生活に大きな支障をきたすため、早期に治療がなされるべき疾患である。交通外傷後に認められる両滑車神経麻痺では Hess 赤緑試験はほぼ正常であり、通常の眼位検査では検出が困難である。また、白内障術後の複視では加齢によって生じる Sagging eye syndrome が原因の可能性がある。Sagging eye syndrome は加齢の変化が外眼筋にも生じるもので、わずかな内斜視、わずかな上下斜視が特徴で、外観上目立たないため白内障術後のトラブルとなる。診断のためには、「外観上目立たないが、強い複視の訴えがある」場合は上下・回旋斜視を疑うことが欠かせない。日常臨床で決して頻度が低くはないはずの上下・回旋斜視を、見逃さずに診断するためのコツと経過観察の仕方、手術治療などについて自験例を用いて解説する。

1983年 Harvard大学・生化学専攻卒業
1988年 Harvard大学医科大学大学院修了
1988年 Harvard大学内科インターンシップ
1989年 Harvard大学眼科レジデンス
1992年 東京医科大学眼科大学院
1998年 大阪大学医学部眼科 助手
1999年 杏林大学医学部眼科 講師
2002年 杏林大学医学部眼科 准教授
2009年 杏林大学医学部眼科 教授
現在に至る

「眼科における治療薬の新しい時代：生物学製剤や他の新薬」

21世紀に入り、医療は革命的な転換期を迎えています。膠原病や癌領域をはじめとする各分野で、効果の非常に高い「生物学製剤」が次々登場してきており、今まで考えられなかった治療成績の向上が見られています。しかし、優れた効果に隠れて生物学製剤に内在する独特な副作用も、懸念されてきております。また、製薬会社は薬剤の高額な開発および生産投資を回収するべくそれらの薬価は非常に高額なものとなり、それによる医療費の圧迫は社会的な問題になっています。眼科の疾患に認可された生物学製剤はまだ少ないですが、眼科医に必要な基本知識、および現在加齢黄斑変性やぶどう膜炎のために認可されている生物学製剤の使用について、また新しい薬剤カテゴリーである protein kinase inhibitors や oligonucleotide drugs も紹介し、薬剤が中心となりつつある医療の将来を一緒に考えてみたいと思います。